

メッセー
ジ
のその外側
のこと

作家 古川日出男

わたしは『平家物語』の現代語訳を二〇一六年に発表した。ところで現代語訳とはいったい何なのだろうか？

これは翻訳の一種なのと言えるし、実際にわたしも「自分は翻訳をした」という意識を持っている。けれども、である。それでは翻訳とはいったい何なのか？

たとえば、つぎのような文章を機械翻訳にかけると、いろんなことがわかる。

〈そこにミカンがあるぞ〉
と、

〈そこにミカンがあるよ〉

その外側をつねにつねに「いるのですよ、その人たちが」と意識させるのが、(わたしたちの操る日本語の、その)古語の世界なのだ、と言い直せる。

さて『平家物語』だ。

じつは『平家物語』には諸本がある。巻数も文体も内容も異なっていて、それどころか題名まで変わってしまったものもある。たとえば全四十八巻の『源平盛衰記』だ。題名が変わり、しかも「平家」ならぬ「源氏と平氏」がそこにフィチャーされた異本もまた、しっかりと『平家物語』の一本にカウントされている事実はおもしろい。

しかし内容的に「おもしろい」のは、十四世紀後半に成立した「覚一本」というテキストで、これは、もともとは、盲目の琵琶法師たちのその当時の語りを文字化したものだった。順番から言うとうと、テキスト(本)があつて、それを琵琶法師たちが演奏した——琵琶を弾いて語った——というのではない。その逆である。まず、『平家物語』を演奏する芸能者たちがいて、次いでその語りをテキスト(「覚一本」)に落とし込んだという流れだ。

だ。

インターネット上の翻訳サイト等で試せば、上記の二つの文章を、たとえば英語に訳してもフランス語やイタリア語に訳しても、解答は一種類になると思う。英語であれば「There is a mandarin orange there.」が模範解答になる。あるいは oranges と複数形になって、「There are ...」となるかもしれないけれども。いずれにしても、機械翻訳が情報としてこたわるのは、それが一個のミカンか、二個以上のミカンなのかであつて、そんなことは日本人の私たちは気にしていないのに(そうした場合は多い)、しかしながら英語側は相当に気にする、ということとは起きる。

なぜならば、それが英語の場合、情報としての優先度が高いからだ。

だが、ちょっと立ち止まってほしい。わたしたちは、この二つの文章——〈そこにミカンがあるぞ〉と〈そこにミカンがあるよ〉が併置された際に、たとえば話し手と聞き手がそこにいるとの設定をすつと感じ取って、それが年長者と年少者のペアだったら〈そこ

わたしの現代語訳も、やはり覚一本を底本に選んでいる。

これをどう「翻訳」するか？

わたしは、やはり、機械的に現代語化されるメッセージの外側ということを考えて。

つまり、この覚一本には本来、紙に書かれているその文字に先立って、これを歌ったり語ったりしている者たちがいた。そして常時、琵琶という楽器がともなわれていた。

これぞ真の「語り手」である。

では「聞き手」は？——真の「聞き手」はいったいのか？

もちろん存在した。

その琵琶法師の聴衆たち、だ。

覚一本は全十二巻+別立ての一卷、すなわち計十三巻あつて、わたしは、この物語を現代語訳するということは、その意味内容を忠実に「いま」に甦らせるだけでは足りない、と判断した。それでは翻訳——真の翻訳——にはならない、と決断した。大切なのはシチュエーションなのだ。それをビビッドに、真に迫るように出現させるといふこと

にミカンがあるよ」と言うのはどちら側か、ほとんど瞬時に想定する。十二歳の女の子が、二十七歳の教諭に向かって〈そこにミカンがあるぞ〉とは決して言わないだろう、と、そんなふうに考えるということだ。

同じ日本語の文章が、意味的には「There is a mandarin orange there.」かそれに類する内容しか孕んでいないのに、このメッセージを伝えている「外側」にいる「話し手」と「聞き手」を、ぼんやりとではあつても浮かび上げさせるのだ。

この、外側のシチュエーションを浮上させるという営為こそが、じつは(機械にはできない)真の翻訳なのだ、とわたしは言いたい。

さらに言いたいのだが、古典の文章は、時代をさかのほればさかのぼるほど、そこに主語が明示されないでも「誰が主体となって行為をしていて、誰がその行為を及ぼされるのか」を伝える。たとえば複雑な敬語システムがやっていることは、それだ。つまり、機械翻訳はメッセージのみを抽出するのに、

なのだ。

わたしは、そういうわけで、拙訳の『平家物語』の語り手に、琵琶を持たせた。

しかも語り手たちを複数にした。

わたしは、『平家物語』が演奏される交響楽的なステージ」をこそ、自分の翻訳の最終の着地点だと見据えたのだった。これを、どうにか現出させられたと思っている。

ふるかわひでお
古川日出男

作家。1966年福島県生まれ。1998年、長篇小説『13』(幻冬舎)でデビュー。『アラビアの夜の種族』(角川書店)『LOVE』(祥伝社)『女たち三百人の裏切りの書』(新潮社)といった文学賞受賞作をはじめ『ベルカ、吠えないのか?』(文藝春秋)『曼陀羅華X』(新潮社)など著作多数。ほかに戯曲やノンフィクション、アニメ化された『平家物語』現代語全訳(河出書房新社)なども手がけ、朗読を含めた多様な文学表現に取り組んでいる。
公式WEBサイト:「古川日出男のむかしとミライ」<https://furukawahideo.com>



撮影:朝岡英輔